

『観佛三昧海経』における白毫相と光明に関する考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学仏教文化研究所 公開日: 2019-07-05 キーワード: 観仏三昧, 白毫相, 六観経, 華嚴経類 作成者: 小笠原, 亜矢里 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1040

The White Tuft between the Eyebrows and the Light in *The Sutra on the Ocean-Like Samadhi of the Visualization of the Buddha*

OGASAWARA Ayari

Key words

The *Samādhi* of the Visualization of the Buddha/ The White Tuft between the Eyebrows/ The Six Visualization Sutras/ The *Avatamsaka Sūtras*

Summary

The Sutra on the Ocean-Like Samadhi of the Visualization of the Buddha 『觀佛三昧海經』 (*Guanfo sanmei hei jing*) is one of the six visualization sutras, and it has been included in the Chinese Buddhist canon and accepted as truth for a long time. However, it is regarded as an apocryphal text by some studies that consider it to have some philological and linguistic errors.

Nevertheless, this text, affected several Buddhist texts, especially Pure land Buddhist texts, 『觀念阿彌陀仏相海三昧功德法門』 (*Guannian Amitufo xianghai sanmei gongde famen*) and 『往生要集』 (*Ōjōyōshū*). These texts referenced the “white tuft between the eyebrows” (*ūrṇa*) and the light it emitted as visualization object. Furthermore, some studies have examined the virtue of visualization centered on the white tuft in accordance with the texts.

Thus, this article describes the function of the white tuft and the light it emitted. The white tuft and the light in this text together constitute, represent, not only one of the thirty-two marks, but also the manifestation of the miraculous power that the Buddha preached about in texts such as the *Avatamsaka Sūtras* and the *Daśa-Bhūmika Sūtra*.

Some studies have observed and proved that this text is closely related to the *Samadhi* texts and that it is in accordance with some *Mahāyāna* Buddhist

texts and commentary texts, including 『禪秘要法經』 (*Chan miyaofa jing*), the *Mahāyāna Mahāparinirvāṇa sūtra* 『大般涅槃經』 (*Daban niepan jing*), 『大智度論』 (*Da zhidu lun*), and others. However, the *Avataṃsaka Sūtras* have, not been studied despite their importance in relation to this text; the role played by the white tuft and the light it emitted are their representatives.

In this text, the light emitted by the white tuft is a miracle that only the Buddha knows about; neither we nor the tenth-stage bodhisattva can understand it.

Therefore, the light of the white tuft is usually hidden inside the white tuft itself. However, despite hiding it, the Buddha showed a little of this light to all living beings because of his deep mercy. In addition, according to this text, one of the concrete merits is the remission of sins for us in this text.

Thus, it is advisable to concentrate on observing each of the Buddha as described in this text; particularly, the white tuft is the most valuable origin of the light, which includes the virtue of the Buddha's power.

『觀佛三昧海經』における白毫相と光明に関する考察

小笠原 亜矢里

『観佛三昧海経』における白毫相と光明に関する考察

小笠原 亜矢里

〈キーワード〉 観仏三昧／白毫相／六観経／華嚴経類

叢書類略号

大正 大正新脩大藏経

はじめに

『観佛三昧海経』（大正 vol.15, No. 643 以下本経）は、長い間 5 世紀の佛駄跋陀羅訳として入蔵されてきた經典であるが、これまでの先行研究において、今日では恐らくは疑經であろうとされている観仏經典類（六観経）の一つである¹⁾。

『観無量寿経』を含む、所謂「六観経」は、その訳出等に於いて多くの疑問が持たれている經典群であるが、後の仏教界に与えた影響は大きく、本経に関しても、特に浄土教系に於いては『安樂集』『観念阿弥陀仏相海三昧功德法門』『往生要集』など、歴代の高僧らがその著述の中で本経の名を挙げる。

中でも『往生要集』に於いて、本経を所依とした「観白毫相」の功德について詳細に説くところは、既にいくつかの先行研究²⁾によって指摘を受けているものであるが、本経に於ける白毫相のはたらきそのものや、光明功德の所依についての言及は見当たらない。

そこで本稿では、本経中に於ける重要相好である白毫相とその光明功德についての考察を行い、經典内でその典拠とされている「諸修多羅」について「十地の菩薩」を手掛かりに、その深源についても検討していくものとする。

1. 本經における相好と白毫相

1.1. 本經の目的と相好

まず本經の目的であるが、「六譬品」第一に於いて、釈尊が「仏滅度後の衆生に対する見仏の方法を説く」ことを明示している。その例として「六譬喩」を挙げながら①懸念、觀仏色身³⁾、②念仏之心、③正念思惟諸仏境界、④觀仏三昧、⑤懸心思惟諸仏境界⁴⁾の五つの為すべきこと及びその功德が説かれるところから、この五つについて説くことが本經の中核を為すものと考えられる。

「序觀地品」第二に於いては、釈尊が冒頭で「云何名爲觀諸佛境界」と宣説し、釈尊在世の衆生の為すべきこととして、上記の中から念仏・觀仏・見仏、分別相好などが述べられ、次いで仏滅度後の四部衆らについても同じように為すべきこととして、懸念・思惟・行禪・三昧正受などが説かれる。

仏滅度後の衆生には、更に經典の読誦と戒律の淨持、懸念思惟して心を散乱させないこと、の三つが別で説かれており、經典によると、この懸念或いは懸心の対象とは、相好をはじめとして、行・生涯・教化・慈悲等々の釈尊のあらゆる境界とされる。

この後、觀察の基軸となる相好について仏の五十六相が挙げられていくが、この五十六相は、先行研究により『禪秘要法經』及び『治禪病秘要法』などの禪觀經典類や『大智度論』などとの関係性が高いであろうことが既に指摘されており⁵⁾、本經が、実践的には仏の相好を正念・懸心思惟して觀察することを重視した經典であることがわかる。

次の相好觀察を詳細に説く「觀相品」第三に於いては、觀察されるべき多くの相好の中でも、特に頂相・額相（白毫相を含む）・舌相・缺瓮骨滿相・憶徳字相・萬字印相・放常光相（肉髻光、白毫光）・臍相が重視されているとみられる。

これらの相好觀察に於いては、単に色身相好の觀察だけではなく、仏伝

系文献に沿った形や十方世界に於いての観察も同時に説かれ、他にも「十地の菩薩」が教説に登場するなどの特徴が認められるからである。

1.2. 白毫相と本経における記述

中でも白毫相については、これらを含んだ観察が二箇所亘って詳細に説かれるなど、より丁寧な形で扱われており、白毫相が本経に於いて重要な相好となっていることがわかる。

本経が白毫相及びその光明に特別な地位を与えていることは、各相好の観察中に於いても白毫相が頻出することや、「観佛密行品」第十二に於いて、釈尊が本経の別名を「亦名観佛白毫相（経）」として、受持するよう阿難に付嘱するところからも疑う余地はない。

白毫相そのものは、大人相の一つとして広長舌相や陰馬藏相と共に、*Sutta-nipāta* (1022 偈) などの比較的古い文献においても既に個別にその名がみられる⁶⁾が、仏伝系文献や大乘経典などでは、大人相の一相として以外にも、光明と結びついて本経のように特別なはたらきを持つ相好として説かれている⁷⁾。

本経の白毫相についての記述は、十巻十二品全体を通じて満遍なく見られるが、前述の「観相品」第三及び、行についての観察が説かれる「観四無量心品」第五、「観四威儀品」第六、本経の後半とされる「本行品」第八に於いて、特にその功德が説かれる。

中でも「観相品」における「額廣平正相」中の「白毛相」と「放常光相」の「眉間光明」は、前述したように「十地の菩薩」との関係性や相好観察の面に於いても詳細に説かれており、以下、この二相について白毫相のはたらきと光明功德について検討していくものとする。

2. 「観相品」第三における白毫相

2.1. 「額廣平正相」における白毫相

「観相品」に於いて最も長く詳細に説かれる相好が「額廣平正相」であ

るが、「白毛（毫）相」⁸⁾はこのうちの一相として説かれる⁹⁾。

ここでは、白毫を「白毛」または「白毫毛」と記述している箇所がいくつかみられるが、厳密な区別が為されているというよりは、見るものによって白毫の見え方が異なる例として挙げられている箇所が多く¹⁰⁾、また、後述するように衆生に目に見える形での具体的な仏力の顕現としても「白毛」と記述されていると思われる箇所もある。

「額廣平正相」の「白毛（毫）相」では、初生時・童子時・納妃時・出家時・苦行時・降魔時・初成仏時において其々に白毛、または白毫相を観察するが、降魔時と成道時以外の観察は比較的短く、降魔・成道の二つが詳細に説かれるといった偏った構成となっている。

このうち、降魔で観察する白毫相は、釈尊が眉間の白毛を直接阿鼻地獄へと伸ばして届けることによって地獄の罪人を救済し、魔族に対しては白毛¹¹⁾や白毫光を擬した形で己の不浄を知らしめるなど、教化のはたらきをするものであるが、白毫光明そのものは、魔王波旬への「降魔」で放光される。

また、この「菩薩降魔時白毫相」を懸心正観する功德は、「無数劫の黒業悪障を滅し、十悪諸煩惱障を除く」¹²⁾とされ、ここではじめて滅罪の功德が説かれる。以下、本経中に於けるこれ以降の相好観察の正観には、この滅罪の功德が説かれることになる。

「如来初成仏時白毫光」が説かれる次の成道では、金剛座上に生じた蓮華に釈尊が坐することで成菩提が完成する描写となっており、この金剛座を生じさせるのは白毛光明の力によるものと説かれ、教説は以下の通りに続く。

佛心の境界は説き盡すべからず¹³⁾。若し廣説するは、一切衆生十地の菩薩に至るまで、知ること能わず、解する所に非ず。是の故に白毫相中に於いて隠して説かず。是の如き白毛光明力故に菩提樹を金剛として莖と為し、根もまた金剛とせしむ¹⁴⁾。 (大正 vol.15, No. 642, 653b.)

ここで「白毫光明力」ではなく「白毛光明力」と記述があるのは、先に挙げたように仏力を具体的に表現したものととも考えられる。

また、本経ではこの成道に於いてはじめて「十地の菩薩」の文言が見られ、更に以下のように説かれる。

既に成佛し已りて、白毫光明の衆相を具足するは、諸の修多羅に佛已に廣説したもう。白毫相光の究竟の處は、十地の菩薩ようやく見ることを得。先に小を説くは、世間の此の事を見易くするに随応す¹⁵⁾。

(大正 vol.15, No. 642, 655a.)

衆相を具足する白毫光明は、十地の菩薩でようやく見ることが可能となるものであり、この光明について小を説くのは、あくまで衆生に見易くしたものとす。

また、本経では、上段の教説のように白毫相から放たれる白毫光明で顕現される仏力そのもの「佛心の境界」も、本来は、一切衆生や十地の菩薩にも不思議であり、それ故に白毫相に隠されていると説かれているが、その白毫相自体の功德も、「如来に無量相好あり。一一の相好中の八万四千の諸相好、是の如き相好も、白毫の小分の功德には及ばず¹⁶⁾」とされている。

以上のことから、本経の「額廣平正相」に於いては、「白毛」といった衆生でも理解可能な具体的な表現を適時用いながら、白毫相及びその光明の持つ絶大な功德を「十地の菩薩」を喩えに、説いていることがわかる。

2.2. 「放常光相」における白毫相

「放常光相」は他の色身相好とはやや異なり、光明そのものを観察する相好となっているが、この「放常光」は本経と『大智度論』の「放光釋論」に特徴的に見られる光明積と思われる¹⁷⁾。

『大智度論』に於いては、常光とは菩薩が生まれた時から備わっている不断のものであるが、光明を受けるだけの眼のない衆生には、それが部分的にしかわからず、放光とは、そうした常光を知らしめるべく身光より放

たれる光明とされる。

身光ゆえに、こうした放光は何らかの相好を介して説かれるものであり、すなわち「具体的に佛身の特定の場所より、特定の時を得て、衆生を警覚するために放たれるのが、放光である。」¹⁸⁾とされる。

本経では、「放常光相」の冒頭に於いて以下のように説かれる。

佛父王に告げたもう。云何に如来の放常光を觀ずるや。如来、今は未来世の凡夫人の爲に當に少光を現すべし。彼の諸の凡夫は當に是を觀じ學ぶべし¹⁹⁾。
(大正 vol.15, No. 642, 662c.)

この後、「放常光相」では肉髻光明と眉間光明の二つが挙げられるが、白毫相光については以下の教説となっている。

佛父王に告げたもう。云何に觀於如来眉間光明と名づくるや。如来、今は此れ後世の諸衆生の爲故に、當に白毫相光に於いて少現すべし。是の語を作す時、時に佛眉間より即ち白毫大人相光を放ちたもう²⁰⁾。
(大正 vol.15, No. 642, 663a.)

本来衆生には見えない白毫光について「小を現ずる」ことは2.1.「如来初成佛時白毫相光」に於ける、「小を説く」の教説に通じると思われるが、ここでは光が世界や仏をめぐる描写が、イメージしやすいよう簡略的に短く説かれた後に以下のように述べられる。

佛阿難に告げたもう。如来の白毫相光は、諸修多羅中で佛が已に廣説したもう。是の如き妙光は、唯、仏と仏とが見、十地の菩薩も見ること明了ならず。是の故に此の中では少分を而して説く。少分を説くは凡夫人の爲なり²¹⁾。
(大正 vol.15, No. 642, 663b.)

「放常光相」の眉間光明に於いては、2.1.と同様、「少分」とはいえ白毫

光とは本来は十地の菩薩にも明了には見えないことを再度説く。更にここでは、懸心、思惟といった文言がなく、詳細な観察に関する描写もないところからも、この教説はあくまで凡夫人の為であると推測できる。

また、現在世においても「如来が少現した白毫光は、父王將いる所の衆中八千人の遠塵離垢を持し、法眼淨を得る」²²⁾と説いているところからも、小現あるいは小分を説く対象が、相好の正念思惟観察に耐えられない凡人であることを示唆していると思われる²³⁾。

3. 華嚴経類と白毫相

3.1. 「諸修多羅」について

本経に於いては、2.1. で述べたように白毫光明が仏力を顕現することが説かれているが、この白毫光明については諸修多羅に「仏已に廣説したもう」と繰り返し説かれる。

この諸修多羅については、最も近いと思われるのは本経に類出する「十地の菩薩」の文言から「十地経」系を含む華嚴経類と推測できるが、本経に影響を与えたと考えられる他の經典に関しても、その可能性を見ておく必要がある。

観仏經典の前駆とされ、本経への影響力が大きいとみられる禅観經典類においては、「十地の菩薩」はほとんどみられず、白毫相も基本的には観想対象の相好の一つである。また、『涅槃経』に於いても「十地の菩薩」は見られるが、白毫相は三十二相の一つとしての扱いとなっている。

本経との関わりはあまり指摘されないが、『法華経』に於いても説法時に白毫光が放光される。ただ『法華経』で白毫光明が放光されるのは「序品」第一と「見寶塔品」第十一、「妙音菩薩品」第二十四のみであり²⁴⁾「十地の菩薩」も見られない。

対して華嚴経類では、「十地の菩薩」は当然であるが、本経中に説かれる「如雜華説」や「於雜華経」といった文言とその教説についても関係性をみることが可能²⁵⁾であるところから、本経に大きく影響したであろう

ことは、ほぼ間違いがないと思われる。

白毫相との関係に於いては、説法時を始めとした白毫光明の放光回数は他の經典の群を抜いており、『八十華嚴』²⁶⁾の「如来還相品」及び「華藏世界品」(『六十華嚴』「盧舎那仏品」相当部分)をはじめとして、「十地品」「如来出現品」以降に於いて特に白毫相光が頻出することから、その関係性を指摘することも可能である。

また、2.1.で述べたように、本經の「白毫光明の衆相を具足するは、緒の修多羅に佛已に廣説したもう。」の「衆相」についてであるが、華嚴經類に於いて諸相好に関して別立てで詳細に説かれるのは「如来十身相海品」である。この「十身相海品」と比較をすると、ここで説かれる如来九十七相の多くは色身相好ではなく、光明そのものである点の本經とは大きく異なる。

しかし、最後には、仏の相好は無量相好として、「十華藏世界海微塵數の大人の相」²⁷⁾とされ、その上で「一一の身分は衆寶妙相を以て莊嚴を為す」と説かれている²⁸⁾。

本經に於ける相好も2.1.で述べたように「如来に無量相好あり」とされ、「是の如き相好も、白毫の小分の功德には及ばず」また、その「白毫光明は無量相好の一切を具足する」とされているところから、白毫相は上記「如来十身相海品」の「十華藏世界海微塵數の大人の相」に通じるとも考えられる。

ただし、本經に於いては「諸修多羅」とあるように、一つの經典に限定することなく、いくつかの經典が白毫相光に関係している可能性も完全に否定できないことには注意しておく必要がある。

3.2. 「十地品」と白毫相光

本經の白毫相光に関しては、前述の如く華嚴經類の影響が大きいものと考えられるが、その説明に於いては「十地の菩薩」と共に説かれていることがほとんどである。従って、華嚴經類の中でも先ずは『十地經』系について、両者の関係性を見ていくのが妥当と思われる。

『八十華嚴』の場合、「十地品」に於ける仏の白毫相からの放光は初地の歡喜地と十地の法雲地の二箇所で見られる²⁹⁾。

爾時世尊、眉間より清浄光明を出したまひ…〈略〉…又一切如来の衆會を照らし、諸佛の不思議力を顕現す³⁰⁾。 (大正 vol.10, No.279, 180b.)

爾時十方一切諸仏、眉間より清浄光明を出したまひ…〈略〉…其の眷属の光明も亦、各彼の諸菩薩の頂に入る。爾時當にこの菩薩、先ず未だ得ざる所の未曾有の百萬の三昧を得、名付けて已に受職の位を得ると為し、佛の境界に入りて十力を具足し佛の數に墮在す³¹⁾。

(大正 vol.10, No.279, 206a.)

白毫放光は、引用上段の「十地品」の歡喜地に於いては仏の世界の「不思議力の顕現」であり、その不思議力は、下段法雲地に於いても「光の灌頂」³²⁾として十地の菩薩を「諸仏の境界」に入らしめ成仏させる具体的な仏力としてはたらいっていると思われる。これは、『六十華嚴』を含む漢訳『十地経』系や梵本においても、共通して認められる³³⁾。

また「十地品」ではないが、『八十華嚴』の「如来現相品」に於いても、仏の眉間白毫光明は仏の無量無辺境界の神通力を菩薩に得さしめんとして放たれており、この光が教説を説く普賢菩薩を顕現するとある。

爾時世尊、一切の菩薩大衆をして、仏の無量無辺境界の神通力を得さしめんと欲するが故に、眉間光を放つ。この光一切菩薩智光明と名づけ、普く十方蔵を照耀す…〈略〉…また諸仏大願之雲を雨ふらし、十方諸世界中に普賢菩薩を顯示す³⁴⁾。 (大正 vol.10, No.279, 029c.)

このように、『華嚴経』に於いては、仏力の顕現が白毫光明の放光を通して説かれる形が「十地品」をはじめとしていくつか認められるが、本経に於いても、仏力の顕現は、成道時に「如来初成佛時白毫相光」を通して

具体的に説かれていることは2.1.で述べた通りである。

結 語

本經に於いての仏の白毫相は、通常観察の対象である色身相好の一つとしてのみではなく、そこから放たれる白毫光明は仏力の顕現としての意味を持ち、それは華嚴經類、特に『十地經』系で説かれる仏特有の白毫光明のはたらきと類似する点があるものと考えられる。

この不思議の白毫光明は、本經に於いては、本来は仏のみが知るところのものであるが故に普段は白毫相の中に隠されているが、その「少分」は放光の形をとって、あらゆる仏滅度後の衆生にその功德が施されるとされ、その具体的な形の一つが「滅罪」として説かれている。

本經は、本来は無量である仏の相好について、色身相好を介して、観察、見仏せしめ、成仏道に導くという佛の大悲に基づいて説かれたものであり、教化の対象は四部衆のみならず未来世の凡夫人をも含むものである。その本經に於いて、一切の相好を具足する光源として特別な地位を持つ白毫相は、仏のはたらきを象徴する相好として、その絶大な功德を説く教説と共に、後の時代へと大きな影響を及ぼしていったものと考えられる。

註

- 1) 月輪賢隆『仏典の批判的研究』百華園 1971 年他
- 2) 福原隆善『往生要集』における『観仏三昧海經』の受容『仏教学浄土学研究』香川孝雄博士古稀記念論集 2001 年 柴田文彦『往生要集による仏心観 — 『観仏三昧海經』の引用を中心に』『駒沢大学仏教学部論集』(34) 2003 年他
- 3) 本稿に於いては「懸念・懸心」と「観仏」は「六譬喩」の教説からも連続性のある概念と見做す。「懸念」と「観仏」が不離であるとの指摘は、藤丸智雄『『観仏三昧海經』における観仏と念仏』『仏教文化研究論集』(3) 1999 年 参照。
- 4) ①「若能至心繫念在內、端坐正受觀佛色身。當知是人心如佛心與佛無異。」②「念佛之心亦復如是。以是心故能得三種菩提之根。」③「正念思惟諸佛境界、亦復如是。」④「觀佛三昧在煩惱地。」⑤「繫心思惟諸佛境界、

亦能安住諸三昧海。其人功德不可稱計。譬如諸佛等無有異。」大正 vol.25, No. 1509, 355c.

- 5) Nobuyoshi Yamabe, "The Sutra on the Ocean-Like Samadhi of the Visualization of the Buddha: The Interfusion of the Chinese and Indian Cultures in Central Asia as Reflected in a Fifth Century Apocryphal Sutra," Ph.D. Dissertation, Yale University, 1999. pp. 245-249
- 6) *The Sutta-nipāta*. PTS ed., 196,4-7
- 7) 阿含・ニカーヤに於ける白毫相は、三十二相中で主として仏の「大人相」の象徴として説かれているが、初期大乘経典では、『華嚴経』や『法華経』に説くように、説法前の放光源として、また仏伝系文献に於いては、『太子瑞應本起経』や *Lalitavistara* 系でその光明のはたらきが降魔時などで個別に見られる。
福原隆善「仏典における白毫相」『印度學仏教學研究』(40) 1991年 pp.3-4
阿含・ニカーヤに於ける三十二相の対応及び大乘仏典の系統別分類に関しては、岡田行弘「三十二大人相の系統(Ⅰ)」『印度學仏教學研究』(38) 1989年参照。
- 8) 本稿に於いては『大正新脩大藏経』を底本とするが、白毫に関する注記がある場合は、宋版『磧砂大藏経』延聖院大藏局編、及び『高麗大藏経』東洋仏典研究会編を参照し、その都度記載する。
- 9) 「額廣平正相」は三相からなり、白毛相・髮際諸色相・枕骨出邊前蓮華相を指すと思われるが、後者の二つについてはほとんど説かれぬ。
- 10) 「時諸八部觀白毫光所見不同。有見白毛猶如諸佛有見白毫、如諸菩薩有見白毛、如已父母一切世間可尊敬事悉於毛端了了得見。」とある。大正 vol.15, No. 642, 654c.
- 11) 大正大藏では「白毫」となっているが、『磧砂大藏経』及び『高麗大藏経』では「白毛」となっている。本經に於いては、本稿で取り扱う引用以外にも「白毛」の表現がみられる箇所がいくつか存在するが、後の浄土教系仏典との関係から、『聖語藏経卷』や敦煌出土の『藏外教典』なども含め、今後に於いて詳細な検討が必要な点と思われる。
- 12) 「繫心正觀菩薩降魔白毫相者、滅無數劫黑業惡障。亦除十惡諸煩惱障。」大正 vol.15, No. 642, 653b.
- 13) 本稿に於ける下線については、本經に於ける重要概念、又は比較対象経典の該当部分で使用するものとする。
- 14) 「佛心境界説不可盡。若廣説者、一切衆生至十地菩薩亦不能知亦非所解。是故於此白毫相中隱而不説。如是白毛光明力故、令菩提樹金剛爲莖根亦金剛。」
- 15) 「既成佛已、白毫光明衆相具足、諸修多羅中佛已廣説。白毫相光究竟之處、十地菩薩爾乃得見。先説小者隨應世間此事易見。」
- 16) 「如來有無量相好。一一相中八萬四千諸小相好、如是相好不及白毫少分功德。」

(32)

- また「是故今日爲於來世諸惡衆生、説白毫相大慧光明消惡觀法。」ともある。大正 vol.15, No. 642, 655b.
- 17) 『大智度論』大正 vol.25, No. 1509, 113b. 他 「放常光」の文言は、本經の影響を受けているとされる後代の『經律異相』や『法苑珠林』などでも見られる。
 - 18) 鍵主良敬「華嚴における佛の光明について (上)」『仏教学セミナー』(5) 1968年 p54
 - 19) 「佛告父王。云何觀如來放常光相。如來今者爲未來世諸凡夫、當現少光、彼諸凡夫當學是觀。」
 - 20) 「佛告父王。云何名爲觀於如來眉間光明。如來今者、爲此後世諸衆生故、當少現於白毫相光。作是語時、時佛眉間即放白毫大人相光。」
 - 21) 「佛告阿難。如來白毫相光、諸修多羅中佛已廣説。如是妙光惟佛見佛、十地菩薩見不明了。是故此中少分而説。説少分者爲凡夫人。」
 - 22) 「如來少現白毫光、持父王所將衆中有八千人遠離離垢、得法眼淨。」大正 vol.15, No. 642, 663b.
 - 23) 更に、この光を見ることの功德は心に百億仏を明瞭に見ることになるともある。「惟見光者心得了了見百億佛。」大正 vol.15, No. 642, 663b.
 - 24) 大正 vol.9, No. 262, 002b, 004a, 032c, 055a.
 - 25) 別稿「『觀佛三昧海經』における華嚴經類の影響について—雜華の文言を中心として—」『印度學仏教學研究』2018年 掲載予定。
 - 26) 本經に影響を与えたと思われる華嚴經類は、年代的には仏駄拔駄羅による漢訳『六十華嚴』が考えられるが、本經の特に前半に於いては、唐代華嚴宗澄観の指摘のように『六十華嚴』に欠落している「十定品」からの影響とも考えられる箇所が存在する。この場合、竺法護訳出の『等目菩薩所問三昧經』または、大本にましまりつつあった別の「十定品」を含む經典の存在の影響も否定できないが、現段階では、大本の成立史の問題からも不明な点となっている。したがって、本稿に於いては特別な場合を除いて、後代の漢訳ではあるが「十定品」を含む『八十華嚴』を参照とする。詳細は前述の別稿参照。
 - 27) 大正 vol.10, No. 279, 255c.『六十華嚴』では九十四相、「十蓮華藏世界海微塵數の佛の大人相」とある。
 - 28) 大正 vol.10, No. 279, 255c.
 - 29) 大正 vol.10, No. 279, 180b. 及び 206a.
 - 30) 「爾時世尊、從眉間出清淨光明…〈略〉…又照一切如來衆會、顯現諸佛不思議力。」
 - 31) 「爾時十方一切諸佛從眉間出清淨光明。…〈略〉…其眷屬光明亦各入彼諸菩薩頂。當爾之時此菩薩、得先所未得百萬三昧。名爲已得受職之位。入佛境界、具足十方墮在佛數。」
 - 32) 山部能宜「禪觀經典にみられる灌頂のイメージについて」森雅秀『アジアの灌

頂儀礼』法蔵館 2014 年 pp.172-173

- 33) 『十住經』大正 vol.10, No. 286, 528c. 『十地經』大正 vol.10, No. 287, 568b. 荒牧典俊訳『十地經』中央公論新社 1974 年 pp.315-316 *Daśa-Bhūmika Sūtra*, Kondō ed.,
- 34) 「爾時世尊、欲令一切菩薩大衆得於如來無邊境界神通力故放眉間光。此光名一切菩薩智光明、普照耀十方藏…〈略〉…復雨諸佛大願之雲、顯示十方諸世界中普賢菩薩。」とある。

(武蔵野大学大学院博士後期課程(専門)相好・白毫相)